

平成23年10月作成の公民館施設整備計画の一部 (優先順位①～⑤)	
事業概要	総事業費 (単位:千円)
①頸城地区公民館明治分館 耐震補強設計・工事	7,137
②吉川地区公民館東田中分館 耐震補強設計・工事	30,836
③吉川地区公民館勝穂分館 耐震補強設計・工事	26,281
④名立地区公民館下名立分館 耐震補強設計・工事	47,183
⑤吉川地区公民館竹直分館 耐震補強設計・工事	12,013

【早川教育長】本年8月から10月にかけて、対象となる安塚区、大島区、吉川区において、各地域にお伺いし、施設の現状と課題を報告させていただくとともに、その在り方、今後の方向性について話し合いを進めてきた。合わせて各区の地域協議会にも施設ごとの取組方向や関係者との協議状況等を説明してきた。

【橋爪】生涯学習センターや公民館分館の適正配置を進める場合、住民合意をどのようにして得るようしてきたのか。また、地域活動の拠点をどう確保するのかなど今後の課題をどう整理しているか。

【早川教育長】本年8月から10月にかけて、対象となる安塚区、大島区、吉川区において、各地域にお伺いし、施設の現状と課題を報告させていただくとともに、その在り方、今後の方向性について話し合いを進めてきた。合わせて各区の地域協議会にも施設ごとの取組方向や関係者との協議状況等を説明してきた。

【柳沢教育部長】計画は、耐震など施設の改修計画であるが、財政との整合がだんだんはかれなくなり、実質的に先送りとなって現状になっている。

【橋爪】東田中分館では現在でも地元が草刈りや雪かきをしていて、行政から見ると、コスト削減がねらいであろうが、貸付ということだけでどれだけ減るのか。(いくらも減らない)。建物を準備して、地域に委ねて地域活動をしてもらってこそ、行政改革ではないか。このことを元(考えを)整理してもらいたい。

12月議会的一般質問で私は、公の施設の「適正配置」、柿崎病院問題、原子力災害対策などをとりあげました。今号では、その概要をお知らせします。

## 地域が存続してこそ行革だ、関係住民の声重視を 公の施設の「適正配置」で激論

【橋爪】パブリックコメント(パブコメ)は、協議中のもも出すのか。協議中の案件のパブコメをいつやるのか。

【総務管理部長】今月21日から1ヶ月間である。地域の声を聞いて方向性を



【タチアオイ】まさか12月になっても咲いているとは。驚きました。タチアオイはアオイ科の多年草。普通は梅雨の頃まで花を咲かせて終わりですが、1回目の開花後、茎を切ったところ、また伸びて花をつけたということです。花言葉は「熱烈な恋」「大きな志」。写真は12月13日、吉川区神田町にて撮影しました。

【橋爪】パブリックコメント(パブコメ)は、協議中のもも出すのか。協議中の案件のパブコメをいつやるのか。

【総務管理部長】今月21日から1ヶ月間である。地域の声を聞いて方向性を

## 柿崎病院は県で運営すべき医療機関

厚生労働省は新型コロナ下にあつては、その対策を優先し、公立公的病院の再編統合問題の検討を先送りしていますが、新潟県は柿崎病院の経営を上越市でやってもらえないかと、その働きかけをやめようとしません。私は今回の一般質問でも柿崎病院問題をとりあげ、市長が先頭に立って「柿崎病院は県が引き続き運営をすべき」と働きかけるべきだと訴えました。

村山市長は、「市としては、後援会や地元町内会を始めとする地域の皆様が主体的に取り組まれる県立病院としての柿崎病院存続に向けた行動を支えるとともに、地域から寄せられる思いを束ねて、しっかりと対応していく」と答弁しました。

10月23日には、市の担当部長が県病院局を訪ね、「市が経営主体になることは財政負担や医師確保の面からも困難である。県立柿崎病院について



は、引き続き県による運営体制を維持存続するよう」求めました。しかし、県は引き下がる姿勢ではないとのこと。

私からは、新型コロナの問題があるなかで、県は地元自治体との交渉を先送りすべきだと重ねて訴えました。

野澤副市長は、「いつ持って来られても受けられる話ではない」とのべていました。その通りです。

はしづめ法一の  
活動レポート

No.1990 2020.12.20

発行・編集 日本共産党上越市議 橋爪のりかず  
Tel 025-548-3628

通じないときは 090-5392-1961

E-mail hasiznyg@ruby.ocn.ne.jp

URL <http://www.hose1.jp/>



ブログ  
「ホーセの見  
てある記」は  
← こちら

橋爪法一

検索

季節は冬。コタツの中に潜り込んだ小さな男の子と女の子が身を乗り出してテレビを見ている。テレビは背もたれのある椅子の上に置いてあって、縦三〇センチ、横四〇センチ、奥行きが三〇センチほどの箱型だ。二人が見ているテレビには、回すとガチャガチャと音がするチャンネルとポリリウム用だろろうか、チャンネルとほぼ同じ大きさのダイヤルが並んでついている。

先日、大潟区に住む弟から、「これ持っていってくんない」と渡されたのがこの写真でした。写真は、いまから三十数年前のわが家の茶の間の風景で、コタツに入ってテレビを見ているのはわが家の子どもたちです。当時、わが家は吉川区の山間部、尾神にありました。

写真の状況から判断して、撮ったのはおそらく私だと思います。でも、不思議なことに、私の記憶には残っていません。

写真に写っているのは、当時、どこかの家でもあった懐かしい光景です。これなら同時代を生きた人たちが喜んでもらえるかも知れない、そう思ってインターネットで発信しました。すると、うれしいことにいくつものコメントが寄せられました。

柿崎区のMさんは、「この写真細かいところまで暖かいです。まず、体は、暖かいことだつて暖をとっているけど、身をのり出してテレビに釘付け。子供の手のふくややかさ。座布団の柄。テレビの下のおもちや2つ。3才位ですかね」と書いてくださいました。細かいところまでよく見てくださるものだと感心しました。

このコメントを読んでから、写真を拡大して見たところ、長男の右手がふっくらしているところや、テレビに集中した子どもたちの視線もよく見えてきました。

この時代、テレビの人気は絶大でした。福井県のIさんは、「懐かしい！じっと見つめるお二人、テレビが楽しみな時代でし

た」と書き、三重県のHさんもまた、「寒い中、二人でコタツに潜り込みテレビを見る。仲良くいいですね、テレビもなつかしい」と書いてくださいました。

写真には、茶の間と座敷を仕切る板戸も写っていました。子どもたちやテレビのほかに、この戸にも多くの人が注目していたきました。

高田に住む大先輩のHさんは、「私は漆塗りの板戸に目が行きました。昔の家はみんなこんな感じでしたね」とひと言寄せてくださいました。

私よりも二〇歳ほど若いSさんもそうです。テレビのチャンネルとともに板戸にも目が行ったようです。

「チャンネルのダイヤル式テレビ懐かしいですね。小学校から帰ると宇宙戦艦ヤマト見て、そのあと祖父母と一緒に大相撲見ていたことを思い出します。襖の板戸もいいですね。昔の我が家もそうでした。いい写真ですね。昔を思い出します」

写真に写っている板戸、わが家ではいまも現役です。当時と同じく居間と座敷を仕切る役目をしっかり果たしています。三十年代経っていますから、塗りがはげたり、一部が割れたりしています。落ち着きがあつて、ホツとする雰囲気がかもし出しているところは昔も今も同じです。

板が割れたのは、兄弟げんかをしたときか、それとも相撲を取った時か。祖父、音治郎は私たち兄弟の相撲の相手にもなってくれました。いろんな思い出がこの戸の割れ目に詰まっています。

この原稿を書きはじめたら初雪が降ってきました。コタツもストーブも本領発揮のときです。でも、今年の冬は新型コロナウイルスの影響で愛知県に住む次男夫婦も孫も帰省しません。来れば、三十数年前と同じように、コタツにもぐり、テレビを見る孫の姿を撮ることができるとは……。

## 避難所運営マニュアルのひな型、今年度中に策定へ 感染症流行下で原子力災害が起きた場合に備え

### ニュースフラッシュ

#### 上越地域各消防署における 空間放射線量率測定結果

測定は毎日午前9時。数値はマイクロシーベルト。1時間当たりの測定量です。消防署によると、通常は1時間当たり0.016~0.16μSv(マイクロシーベルト)だとのこと。

	12月9日(水)	12月16日(水)
上越南消防署	0.057	0.057
上越北消防署	0.050	0.040
新井消防署	0.053	0.057
頸北消防署	0.057	0.057
頸南消防署	0.060	0.073
東頸消防署	0.053	0.043
名立分遣所	0.053	0.057
高士分遣所	0.050	0.057

10日の本会議で村山市長は、感染症流行下で原子力災害が発生した場合に備え、上越市も参加する「原子力安全対策に関する研究会」で、今年度中にも、市町村が運営を担当する「一時集合場所」や「避難経路所」、「避難所」における“感染症に対応した運営マニュアル”のひな型を作成することを明らかにしました。これは私、橋爪の一般質問に答えたものです。

質問の中で私は、「新型コロナウイルス感染症の問題が出てくる中で、原子力災害対策は一段と厳しくなった。こうしたなかで内閣府は11月2日に、『感染症の流行下での原子力災害時における防護措置の実施ガイドライン』を出した。読んでみてびっくりした。例えば、屋内退避については、放射性物質による被ばくを避けるために窓の開



け閉めによる換気は行わないことを基本にする。そう言いながら、感染症対策のことを考えて、「(放射性物質の放出に注意しつつ)30分間に1回、数分間窓を開けて換気する」としている。これでは、放射性物質による死を選ぶか感染症による死を選ぶか、ということになるのではないかと指摘しました。

上越市等が作成する避難所などの運営マニュアルのひな型がどうなるものになるか注目です。